

巻頭言

岐路に立つ

研究管理官 埴田 宏

咲いてゐるのは みやこぐさ と
指に摘んで 光にすかして教えてくれたー
右は越後へ行く北の道
左は木曽へ行く中仙道
私達はきれいな雨上がりの夕方に ぼんやり空を眺めて付
んでゐた
．．．



立原道造の「村はずれの歌」は、信州追分宿から西に向かう道、中仙道と北国街道の「分かれ」の路傍。二つの道は並行して、同じ方向に向かっているように見える。空を飛ぶ鳥ならばともかく、地面を歩く人には行く先が見えない。初めての道では、何を基準に判断すべきだろうか。個人の場合は直感でかまわないが、組織として進む場合は慎重になる。とはいえ、目的地へ向かうという認識があれば、自ずと道は定まる。あれこれ迷い、判断を遅らせるのは最悪である。

森林・林業研究者が到達しようとする場所は何処なのか、私にはよく分からなかった。森林資源の有効利用、水土保持機能の回復、生産力増強、環境保全等々、その時代の社会情勢に合わせて方向を変えながらさまよってきたように思える。リオ・サミット以降は「持続可能な森林経営」という明確な目的地が見えてきた。そして、当研究所百年の「ミッションステートメント」で具体的に宣言されている。しかし、その峰は霧に包まれ、何処にあるのかまだ見えない。

道標というのは有難い。林業試験場創設以来の諸先輩が、新たな道を切り開き、山なみを越える度に、目印を残してくれた。そのおかげで、森林・林業に関するシンクタンクとして、各種の要請に応えることができた。今後もできるだろう。しかし、私たちの基本業務は、未知の領域に踏み込んで、新しい道を作ることである。ここに道標は無い。

道に迷ったときの鉄則がある。とにかく上を目指し、尾根に登る。疲れていても下へは降りない。谷は無数にあるが頂上はひとつ、だから道が見つかる。当面は苦しくとも、全体を俯瞰できる位置に着くという意味もある。易きに流れる例として、「データが集め易いから、ここを試験地とした」というのがある。街灯の下なら明るいから、落した場所ではないけれど、そこで探すという理屈である。いつまでたっても見つからないわけだ。

世間の声に耳を傾けるということは大切であるが、多数意見にくみすることが良いとは限らない。まず、森林が長期的に安定すること、林業を担う山村の振興につながることを第一に考えなければならない。都市住民・消費者と意見が割れた場合には山村・生産者側に立つ役割が課せられている。ここを間違ってはならない。そして、分かれ道で迷ったときは、より難しそうな方に挑戦する。これが私たちの基本原則ではないだろうか。

[巻頭言] [[What's New](#)] [[報告](#)]

[[所報トップページへ](#)]